

IT活用事例
[学校編]ネットに潜む
危険を学ぶ
道徳教育型のIT学習

- 児童のITリテラシー向上と有害情報の増加で情報モラルが課題に道徳的な視点から取り組むIT学習で注目集める瀬田小学校
- 基本コンセプトは、「体験型」学習
- 6年間かけて体系的に道徳・倫理観を育成

IT教育は児童のITリテラシーを飛躍的に向上させたが、新たに情報モラルの問題も生み出した。成人向けホームページ(HP)など児童にとって好ましくない有害情報に接する機会が増加し、出会い系やチャット(注1)といったコミュニケーション系HPが発端の事件に、児童が巻き込まれるケースが頻発。教育現場では対応策を模索している状況だ。

滋賀県大津市の市立瀬田小学校は、道徳や倫理の視点からITを学ぶ「情報モラル教育」を導入することで、有害情報に対する安全策を講じている。同校が取り組む情報モラル教育とは、情報を判断・管理できる道徳・倫理的な視点を児童自らが身に



瀬田小学校には、コンピューター・ルームに40台のパソコンがある。さまざまなプロジェクトに応募するなどして集めたもので、OSは多種多様だ。

また、携帯メールの体験型学習では、実際に個々の児童が携帯電話を使う。クラス全員となると、40台もの端末が必要だが、「端末を貸し出してくれるNPO法人などがある。外部団体の協力を得ることで環境を整えることはできる」(石原教諭)という。

付けること。もちろんフィルタリング(注2)などシステム側で有害情報をシャットアウトする基本的な対策も欠かせない。

しかし、同校で情報教育を担当する石原彦教諭は、「これだけパソコンや携帯電話が普及している社会では、システム側の対策だけで有害情報を完全に防ぐことはできない。児童が自分で正しく対応できる知識を習得することが必要。これは将来的にも有用なはず」と指摘する。有害情報を排除するとともに、児童にも情報を扱う上での道徳や倫理観が欠かせないというわけだ。

体験で道徳視点を実感

瀬田小学校では、児童が道徳的な視点から情報を判断・管理できる力を習得させるため、「体験型学習」と「体系的学習」の2方向からIT教育に取り組んでいる。

まず「体験型学習」とは、実際にチャットや不正アクセス、架空請求などを擬似体験することで道徳や倫理に対する理解を深めるもの。石原教諭は、「単に机上で知識を覚えるのではなく、児童自身に『モラルとは何か』をリアルに感じてもらうことが大事」と話す。

ここで、体験型学習の詳細を見よう。授業のポイントは、

使い方の学習

教師の仕掛け

児童自身による発見

この3つの流れで授業が進められる。

の使い方の学習は、チャットや電子掲示板といったコミュニケーション系HPなどの正しい使い方を覚えることが狙い。

この時にポイントとなるのは、適切な使い方を教えた上で、児童に自由に使うこと。まずは楽しむことが、正しいモラルの第一歩だからだ。

チャットを例にあげれば、まず教師が正しいやり方を教える。次にクラスの全児童を参加させて、チャットを自由に楽しんでもらう。これにより児童がチャットの使い方を身に付け、特徴を理解するのだ。クラスという閉鎖的な空間だけでチャットを行なう必要があるため、市販されている「キューブコミュニティー」という学習用システムを活用している。

正しい使い方を習得した後、の教師の仕掛けを行なう。この狙いは、インターネットを介した情報には危険性もあることを体験してもらうこと。そのために、児童が有害情報に

接する機会を擬似的に作り出すのである。

ポイントは、教師の仕掛けである点を伏せること。有害情報に触れた時の気持ちを純粋に感じてもらうことが重要だからだ。

例えば、チャットでは児童にハンドルネーム（注3）を使ってもらい、誰の発言が特定できない状況でチャットに参加してもらおう。この時、教師は複数のハンドルネームを用いて、中傷や個人情報の暴露、扇動など役割を持たせてチャット上で悪意のある書き込みを行なう。児童は戸惑うが、悪意の書き込みに対して自分なりの意見を述べるという。

そして、正しい道徳観や倫理観を身に付けてもらうための仕上げが、

の児童自身による発見だ。教師が解説して問題点を指摘する方法では、児童は受け身になってしまいモラルに対する理解が深まらないという。ここでのポイントは擬似体験を通じて感じたことを、児童が話し合い自分たちで問題点を発見し、正しい対処法を考えること。教師は適切に児童の考え方を補い、解説を加えるという役割を担う。

実際の授業では、有害情報を体験した後に、グループごとに感想や問題点を話し合い発表させる。話し合いを通じて、児童は何度も情報モラルについて意識することになる。教

師の書き込みに意見を述べる段階、グループ内での話し合い、他グループの発表内容といった具合だ。この繰り返し、チャットや電子掲示板などインターネット上のコミュニケーションで起こり得る問題点や危険性を深く理解することにつながる。

6年間で道徳・倫理観を育成

体験するといっても、道徳や倫理に対する感じ方は、学年によって異なるもの。また、「道徳教育は段階を踏みながら、理解を深めていくことでしか身に付かない」（石原教諭）という。

そこで瀬田小学校では、体験型学習の効果を高めることを狙いに、「体系的学習」を導入。1年生から段階的な道徳感の育成に取り組んでいる。

ここでいう体系的学習とは、設定されたテーマについて、簡単なレベルから内容の深いものへと理解を深めていくこと。例えば、1年生では「悪口を言っちゃいけない」といった基礎的なレベルから出発して、最終学年の6年生では「差別や偏見」という深い問題を体験するとともに、ルールを知識として理解するといった具合だ。

具体的なカリキュラムは表にある通り。体系的学習のベースは、「ケーススタディ」と「知識理解」にある。ケーススタディでは道徳や倫理の知

識として学ぶべきテーマが学年ごとに体系化されており、着実に道徳観や倫理観を育成することができるという。基本テーマは道徳や倫理観を身に付けることが目的で、「不適切情報への対応」「適切なコミュニケーション」「個人情報の保護」が、これに相当する。知的財産を扱った「知的財産権の尊重」や、「セキュリティ」についての学習なども含まれており、さまざまなケースに幅広く対応できるカリキュラムとなっている。

「知識理解」では、道徳や倫理についての理解を深めることを目的に、社会や生活という大きな視点から情報の関わり方を学習。総合的な視野で情報モラルの管理・判断能力を身に付けさせている。

モラル教育の成果を評価することは難しい。だが、瀬田小学校の児童たちは「よく考えてから書き込みをする」「おかしな情報を見たら親に相談する」など自分なりの対応策を持つ。同校で学んだ道徳観や倫理観は、これからITを活用する際、さまざまなシーンで役立つことだろう。

（注1）出会い系・チャット：出会い系はもともと趣味の交流や友人探しなどを目的としたHPのこと。チャットはインターネット上でリアルタイムにメッセージをやり取りして会話を交わすこと。音声の替わりに、画面上の文字で会話するイメージ

（注2）フィルタリング：特定のコンテンツの閲覧を制限する技術。セキュリティソフトやシステムなどに機能の一つとして搭載されている

（注3）ハンドルネーム：電子掲示板やチャットなどに参加する時に使うニックネームのこと

表1 「情報モラル教育」の学習コンテンツ概要

	ケーススタディ					コミュニケーション実践			知識理解	
	不適切情報への対応	適切なコミュニケーション	個人情報の保護	知的財産権の尊重	セキュリティ	インターネット	掲示板・チャット	メール	情報化社会の特質	情報技術と生活
1年生	×	悪口の禁止	×	勝手なコピーの禁止	×	受信	壁新聞ポスター	手紙	×	×
2年生	有害情報	×	アンケートに注意	×	パスワードを大切に	受信	壁新聞ポスター	手紙	×	×
3年生	正しくない情報	いたずらや悪口	自分の名前住所・電話番号	作品を大切に	パスワードの保護	検索	電子掲示板	電子メール	町の情報機器	知らせてくれるものを探す
4年生	成人向け情報	相手を傷つける言葉	友人の個人情報	勝手なコピーの禁止	ログと履歴	検索	電子掲示板	電子メール	情報化による社会変化	身近なメディアの良さや特長
5年生	危険な情報（ドラッグ・自殺）	差別や偏見	アンケートに注意	情報発信で守ること	ウイルス	発信	チャット	携帯メール	世界を結ぶ通信とネットワーク	情報ネットワークの利便性と危険
6年生	危険な情報（詐欺・架空請求）	匿名性・覆面性	盗まれる個人情報	違法コピーに注意	不正アクセス	発信	チャット	携帯メール	情報化社会の過去・未来個人・社会	情報の読み解き、メディア特性に応じた利用